

“にれのき”は、エルムアカデミーが、父母・OB・サポーターに向けて発信する情報誌です。



にれのき

2004年1月号



発行：エルムアカデミー
〒142-0053 東京都品川区中延 5-6-14-2F
電話：03-3784-5676
HP：<http://elm.m78.com/>
e-mail：elm@kiwi.ne.jp

特集

20周年を迎えるにあたって

小学部特別カリキュラム後期実践『よのなか』を学ぶ

エルムの「こねまで」と「こねから」

20周年を迎えるにあたって

代表 矢沢宏之

エルムアカデミーは二〇〇四年一月四日をもって、20周年を迎えることができました。「地域に根ざした学びの場」として千名を超す子どもたちを送りだしてきたことは私たちの誇りです。そして、エルムアカデミーが20年間、この地で教育活動を行うことができたのは、父母をはじめとして地域の方々や、多くの方々の有形無形のご支援のおかげだと思っています。この場をお借りしてあらためて皆様方にお礼を申し上げます。

エルムは創立当初から、「一人ひとりの成長や発達にあわせて、子どもたちに寄り添う教育」を目指

してきました。そのためには、父母や地域・学校との結びつきを強めることを大きな柱にしてきました。そして、何よりも子どもたちの成長の場である小学校や中学校、高校との結びつきを重視し大切にしてきました。

特に、ここ数年、この結びつきは着実に前進してきています。校長先生をはじめ担任の先生など、多くの先生方がエルムに見学に来てくださっています。また、私たちエルムの側からも子どもたちの通う学校へ積極的に訪問するようになっています。その結果、エルムでの授業が不登校の生徒・児童の出席として認められたり、学校や

地域の会合に講師としてエルムの教員が話をするなどの機会が増えています。つい最近でも、親子もちつきの小学部企画（特カリ）に、小学校の担任の先生たちが3名も子どもたちの様子を見て来てくださいました。先生たちが来てくれたことに、子どもたちは喜び、親たちは「わざわざ貴重な休みの日に来てくださった先生に感謝したい」と語っていました。

この20年間培ってきたエルムの結びつきの実績は貴重なものです。エルム創立当初の20年前と比べると、社会がより複雑化し、子どもたちが見えにくくなったのは事実です。ですから、父母・地域・学校がより結びつき、ネットワークを強めていくことは、本当に求められていることです。子どもたちをとりまく、親たち、先生たち、地域の人たちがお互いの結びつきを強め、よりお互いを見通せるこ

とが大切です。見えないことで、お互いが「不安」になり「不信」を生むのではなく、見通せることで「安心」し、「信頼」を生み出すことができるのです。

その結びつき、ネットワークの結び目になることがエルムの担う一つの役割になっているのではないのでしょうか。今こそ、エルムが結び目としての役割を自覚し、子どもたちへの教育という未来への結びつきを大きく、太く、強くしていくが求められています。

エルムは「信頼」を共有することをキーワードに、これからも父母、地域そして学校と結びつき、つながりを一層強めて活動をしていきたいと思っています。更なる皆様のお力添えをお願いし、20周年を迎えるにあたってのごあいさつにしたいと思います。

もうひとつのエルムを探して

ESS事業部代表 小原祐二

前号の「にれのき」(二〇〇三年十月号)でも報告しましたように、エルムは20周年を前に、昨年三月よりひとつの大きなプロジェクトをスタートさせています。それは、

簡潔に言えば、エルムが送り出した一〇〇〇名を超える卒業生たちとともに、「地域をつくる」事業を展開しようというものです。

この事業を推進するためにESS (Elm service supply) エルム・サービス・サプライ) 事業部を立ち上げ、学習塾以外の分野でも活動し、若者の地域での雇用を創出し、豊かな地域づくりのための第一歩を踏み出しました。具体的にスタートさせた事業は、①IT関連事業、②デザイン・パブリッシング事業、③人材派遣事業の3つです。詳しい理念や私たちの思いに

ついては、左記にあるESS業務案内のパンフレットからの抜粋をお読みください。

私たちエルムアカデミーは、右肩上がりの経済成長神話がまだ信じられ、「勉強すれば報われる」という価値観が依然として説得力をもち、教育の世界にも競争と選別がすすんでいた1984年、“すべての子どもたちに確かな学力を”というスローガンを掲げ、品川の地に学習塾として産声をあげました。以来、およそ20年にわたって、いわゆる進学塾や補習塾とは一線を画す教育実践で、子どもたちの学力保障や人格形成に力を注いできました。

今、私たちの関心は、20年に及ぶ実践の中で社会に送り出してきた、在籍する子どもたちの10倍以上にもなる卒業生たちにあります。バブル崩壊後、エルムの卒業生たちも例外なく、この長引く不況の波に飲み込まれ、厳しい現実と日々闘いながら自分を探し、生かせる場所を求めています。こうした若者たちに、「エルムとして何かできることはないか?」というのが、ESS事業部発足の大きな理由です。

これまで私たちが築きあげてきた実践は、ただ単に子どもたちに“勉強を教えること”ではなく、自分を見つめ“いかに生きるか”を鋭く問い、自分探しと自分づくりを援助することでした。歴史を築きあげた今、私たちがめざすのは、もうひとつ先のステップです。

上記のような活動をすすめていくうえで私たちがキーワードとして掲げているのは、“地域”です。現在、在籍している子どもたちだけでなく、卒業生も、保護者も、教員も、そして地域に住むすべての人々にとって、地域が住みやすく、豊かであること。そしてそこに住む人間とその未来を豊かに育む共同と協同、協働を内包した有機体であること。そんな輝く未来を築き上げるひとつの方法として、ESS事業部は存在します。

ある」というのがこの間の実感です。来年度からは、ESS事業部として3名の新人を採用することも決まっています。学びの場として子どもたちを育てつつ、その子どもたちが豊かに育つことができる地域と、誇りを持って働くことのできる地域を創るため、私たちの挑戦は続きます。これからも皆様のご支援をお願いいたします。

活動を始めてから10ヶ月。すでに各分野で複数の企業・団体・個人の皆様から仕事を受注し、事業は順調に発展しています。「地域の人の声に耳を傾け、そしてその声を丁寧に取り上げれば、まだまだ私たちがすべき仕事はたくさんある」というのがこの間

『ありがとう』を『商品』に込めて。

後期小学部特別カリキュラム報告

小学部主任 中塚史行

はじめに

「儲け主義」からの脱却

毎年年末に行われる父母会主催の「親子もちつき」に、小学部が特別カリキュラム（以下、特カリ）の一環として子どもたちのお店を出店するようになってから3年がたちました。2学期が始まると、子どもたちからも「今年はどういうお店をやりたい」という声が自然とあがるようになり、また、イベント本番が近づくにつれて、父母や地域の方からも「今年の子どものうちのお店は何なのかな？」という期待があらわれます。こういうことから、子どもたちのお店は、このイベントでまさに目玉的存在に成長しました。

昨年までの企画では、子どもたちのお店は、どちらかというところ「儲け志向」が強く、商品そのものへのこだわりや、お店をつくる過程での「学び」の部分に課題を残してきました。

そこで、今年度の2学期特カリでは、親子もちつき企画での出店を「儲けのため」とはせずに、子どもたちのつくる「商品」にどれだけ自分たちの気持ちを込められるか、ということを大切にしながら、話し合いや準備を行いました。

徹底的に「こだわる」ということ

自分たちの思いが込められた「商



「商品」をつくりあげるには、自分たちしか持てない「こだわり」が必要。今年は「ラーメン」と「ホットドッグ」が、子どもたちが選んだテーマとなりましたが、それぞれどういう思いを込めた「商品」にしあげていくには、さまざまな試行錯誤がありました。

ラーメンについては、スープの種類、めんの種類、具の種類、それぞれについて、たくさんの中から「これだ！」というものを話し合っ選んでいきました。特に麺づくりについては、小麦粉の配合やかん水の配合を変えながら、試作と味見を繰り返して、自分たちの納得のいく麺のレシピをつくりあげました。また、ラーメン修行のために、原宿まで出かけて、雑誌やテレビなどで紹介されている有名ラーメン店へ行きました。

そこでは、ラーメンの味だけではなく、店の雰囲気や店員のサービスなどもチェックし、お客さんが本当に満足してもらえるおいしいラーメンの味と、気持ちのいいサービスの行き届いたお店をつくる

という意識を高めていきました。

ホットドッグについては、パンとソーセージどちらも手作りできるという目標を貫きました。どちらも技術的には非常に高度で、子どもはおろか、大人が作っても失敗の連続でした。パンは気候によってもその質が左右されることに加え、成形が非常に難しいものでした。また、ソーセージは、肉詰め作業から燻製まで、常に温度を一定に保たなければならぬ、非常にデリケートで集中力がある作業が必要とされました。そこで、パン職人になっていくエルムのOBに指導を受けたり、知り合いのお肉屋さんやアドバイスをもらったりと、文字通り悪戦苦闘を重ね、ようやく納得のいく味のホットドッグを完成させました。

どちらのお店も、お金をもらって売ることが出来る「商品」として、はずかしくないものをめざして、妥協のない「こだわり」を追究しました。

「商品」が完成したら、次はその

「商品」をどのように売るのが、その戦略について話し合いを行いました。看板やポスター、チラシなどを作成し、荏原町商店街のお店一軒一軒に自分たちの企画について、自分たちの言葉で説明をしていきました。しかし、いざ知らない大人を前にして、自分たちの企画をアピールすると、緊張して頭が真っ白になってしまい、思うように言葉がでません。「もっとしっかりしなきゃお客さんが来てくれないよ！」という大人の厳しい叱咤激励を受けましたが、そういう苦い経験も、子どもたちにとっては『よのなか』を学ぶまたとない機会となったと思います。

「初めての特力リで、すっごい緊張して、うまくいかなかったと思ったら、思ったより楽しかった。最初はパンを焼いた。むずかしくて、タイミングがわからなかった。ウインナーとのタイミングがわるく、最初は冷めていると言われた。

「はじめのころはラーメンがおせじでも言えないくらいうまくできなかったけど、今回はとてもうまくできたことがうれしかったです。昨日の夜は、ひたすらラーメンをつくらっていたので、もう体がポロポロだった。今日は本当によかったです。ぼくはフロアマネージャーをやりました。今日のことはたぶん一生心にのこると思う。」(5年男子)





でも、なれていくうちに楽しくな
った。次はホットドッグを配る役
で、周りのおじさんたちが手伝っ
てくれた。周りの人のやさしさも
わかった。ウインナーを焼くとき
は楽しかった。自分が一番やりた
かったから。ずっと練習してき
て、今日成果が出てよかった。お
客さんがおいしいと笑ってくれて
すっごいうれしかった。みんなで
協力できてよかったと思う。とっ
てもよい一日になった。最初の思
い出になった。友だちという大事
さがわかった。6年生は最後だか
ら、みんな心に残っていると思っ
つ。みんながんばったと思う。」(6年
女子)

「今日、ホットドッグを売って楽
しかった。ウインナーの注文がか

たよっていてこげたりして、売り
物にならないウインナーがあつて、
ちょっとショックだった。トッピ
ングの仕事はあまりなくて、他の
人のレタスをちぎる仕事を手伝っ
たりしていてけっこう疲れた。お
客さんに「おいしい」と言われ
てうれしかった。今日までずっと
やってきてよかったなあと思っ
た。今日、つかれたけど、とって
も楽しかった。チヨリソーしか食
べられなかったけど、おいしかっ
た。」(6年女子)

まとめ

後期特カリは約3ヶ月もの
間、一つの「商品」を完成させる
ために、試作や話し合い、調査や
学習を繰り返してきました。お客

皆さんに「おいしい」と言ってもら
えて、お金を払ってもらえる「商
品」をつくるというのは、子ども
たちにとっては予想以上に難しい
課題でした。しかし、自分たちで
手間ひまかけてつくりあげたラー
メンやホットドッグを、お客さん
に食べてもらい、おいしいものを
食べることの喜びや、気持ちのよ
い環境で食べることのうれしさな
ど、「商品」にこめられた思いを伝
えるということは、「儲けを追究す
る」というテーマでは決して感じ
ることのできなかつた成果だつた
と思います。さらに、よい商品を
つくりあげるためには、仲間との
チームワークや一人ひとりの積極
的な協力が大切であることも子ど
もたちは実感してくれたと思いま
す。

ホットドッグもラーメンも、ど
ちらも本番で準備した約一〇〇食
を時間内に完売することができま
した。自分たちが心をこめてつく
ったホットドッグやラーメンを、
多くの人たちに届けることができ、



若手教員の「ルーエッセイ」



第3回
山口 拓真
(中学部)
大学1年

『6年間。言葉で表

すと短い、このエルムで過ごした6年間は充実したものだった。』。中学3年の「まとめの作文」の出だしはたしかこうだった。今こうして「にれのき」の原稿を書いている自分

分は、エルム生活10年目を迎えている。

生徒としての9年

間、エルムは「もう一つの学校」だった。学校とは違ったモノがあった。それが、小学部だと特カリやキャンブ、中学部・高校部だ

と合宿だった。

キャンプでは、みんなで料理コンテストをしたり、服を染めたりと普段の生活では体験できないことをやり、特カリでは性やエイズについてなど小学校では習わなかったことを学んだ。こういう所に、小学生ながらエルムの魅力を感じていた。

中学部の合宿では、尊敬できる先輩、一生懸命やることの大切さ、そして同じ目標に向かってお互いに悩んだり励まし合える「仲間」を得られた。特に「仲間」の存在は、この後の進路という問題で大きなモノとなった。お互いに悩んだり励まし合える「仲間」がいたから、進路という一つの大きな山に立ち

向かえられたと思う。自分の夢や不安や悩みを本音で語れる「仲間」を手に入れたのもエルムだった。

高校部の合宿では、もう一度自分を見つめ直すことができた。高校に入ってから、一生懸命をやることを恥ずかしいと思い、友だち関係もうわべだけで、感動することも忘れていた。「何となく」、「とりあえず」という言葉が自分には似合っていた。それが当たり前になつていたので、そうなっている自分に気づかないでいた。合宿に行つて初めて気づかされた。気づかしてくれたのは中学生たちだった。合宿での中学生の姿はそのときの自分にとってまぶしかった。今までの自分が恥ずかしく思えた。

そして、もう一度中学生のときの自分を取り戻そうという気になつた。それから合宿は、一年間の振り返りの場所となつた。毎年、ダメだったなあと思うことがあり、それは自分の弱さだけれども、それでも高校3年の合宿の最後には、エルムのやつていることやエルムで学んできたことは、決して恥ず

かしいモノではないし、いつまでも持ち続けていかなければいけないモノだと胸を張って思えるようになった。

「合宿に来て一度も自分の気持ちにウソをついていない」。合宿の日誌で書いた一文。エルムの合宿、エルムのクラスはこの一文ができる場所だ。こういう場所を作り出しているのは、間違いなくエルムの生徒だ。このことができなかったらそれはエルムのクラスではなくなるのではないかと思う。

生徒として、エルムの凄さや素晴らしさを感じてきた。自分は、このエルムで学び過ごしてきたことを誇りに思うし、今の自分がいるのもエルムの存在が大きい。今度は教員としてエルムの凄さや素晴らしさを伝える番になった。生徒時代の自分が感じたように、エルムのやつていることやエルムの仲間を誇りにしてほしい。そして、誰にとってもエルムが「大切な居場所」であるようにやつていきたいと思う。

エルムアカデミー創立 20 周年記念行事

エルムアカデミーは今年で創立 20 周年を迎えました。「地域に根ざした学びの場」として千名を超える子どもたちを送りだしてきました。これもひとえに父母や地域のみなさまのおかげだと思っています。

私たちのめざす教育は、父母や学校、地域と結びつきながら、一人ひとりの成長や発達にあわせて、子どもたちに寄り添うことが原点です。

この原点と同じ視点で教育実践を一貫して追求してきたのが、北海道余市町の北星学園余市高校です。テレビドキュメンタリーやドラマ「ヤンキー母校に帰る」の題材にもなり話題になっ

た学校です。毎年、私たちエルムの卒業生もこの高校に入学して学んでいます。

このたび、北星余市高校の先生や卒業生と私たちエルムの教員と卒業生などが一同に介して話し合い、「今の日本の教育にとって大事なものは何か」、「青年たちは何をめあてに学んでいるのか」などを現場から率直な声をあげていきたいと思っています。

20 周年を機に、もう一度、私たちの原点を見つめ直し、教育そのものを問う企画です。ぜひ、多くの方の御参加をお待ちしております。

北星学園余市高等学校長 佐々木成行 （北星学園余市高等学校ホームページから）

子どもたちをのびのびと心豊かに育てたい—誰しもの願いですが、今日の教育の場を取り巻く社会環境は必ずしも心豊かとはいえません。創設からの北星学園余市高校の歴史は、競争原理から追い出され、教育の機会が保障されていなかった生徒たちと共にありました。その姿勢は現在でも変わっておりません。様々な理由で高校を中退した生徒、小中学校で不登校に悩んできた生徒、ゆっくりとのびのびした高校生活を送りたい生徒たちが、いま、自然豊かな余市町に集っています。

北星学園余市高校は、学校という集団の生活の中で同世代から学び、自分の居場所が保障され協力し合える関係を通して、個性が伸ばされ人間の豊かさが育てられるという視点を大切にしています。みなさんを迎える私たち教職員も、生徒とはだかで付き合える人間味豊かな存在でありたいと思っています。また、生徒の成長を通して学校と父母とのつながりを深め、全国にその輪を広げています。

2004年3月21日（日）

会場 品川区立荏原文化センター大ホール

東急池上線荏原中延駅下車 5 分

開場 13:00 開演 13:15